

■ ■ ■ 新たな出会いと可能性 ■ ■ ■

9月17日、日韓国際シンポジウム「共生の方法論—移民当時者のエンパワーメント—」を開催しました。この企画は、トヨタ財団助成「日韓移民ユースのエンパワーメントのためのディーセントワーク推進プロジェクト」の一環で、日韓の研究者、KFC、すたんどばいみー、韓国のNGOがプロジェクトメンバーとなり、日韓の移民の若者のエンパワーメントと仕事創設を目指したものです。

シンポジウム開催2日前に日本側と韓国側メンバーの最終確認の会合があり、その後メンターとインターンとに分かれそれぞれ横浜中華街観光に出かけていきました。インターン側は、総勢11名が集まり中華街を歩きながら3月に韓国で会って以来の募る話をお互いにシェアして盛り上がっていました。「もっとインターンどうしがお互いの活動における思いや課題を共有し合う場が欲しい」という思いが叶い、このよう場をもつ事ができました。

シンポジウム当日、朝からどしゃ降りの雨となり天気には恵まれませんでしたが、それでも大学生や記者、NPO関係者、行政関係者等と多方面からの約60人の方々にお集まり頂きました。第一部では日本女子大学の清水睦美先生から日本のニューカマーの若者の状況をお話いただきました。第二部では、韓国側と日本側のそれぞれのフィールドでの活動紹介や課題についてレクチャーがありました。韓国側の報告で感じたのは、移民ユースに接近するためには、机上や教室内での支援に特化しない多彩な活動の在り方があるということでした。私たちがすたんどばいみーの活動は「学習支援」ばかりに特化しており、時に拾えない子どもたちがいるのではないかと思う事もあります。しかし、限られた時間とお金と人員の中で多くの移民の若者や子どもたちと出会うには限界があるのも事実です。こうした「ジレンマ」を抱えながら日々活動する意味や日本社会に提示できる課題を考えるNPOの活動は、誰もができる活動ではないのかもしれないかもしれません。

今回海を越えた仲間に出会ったことで改めて思えたことがありました。それは、私たちはこれからも移民ユースがそれぞれのホスト社会の中で中心的な課題として扱ってもらえるような提言を続けることです。マイノリティー当事者が抑圧されない「声」が反映される社会を目指し続けます。今回私たちににとって最も大きな収益となったのは、活動や提言を続ける力を与えてくれる仲間に出会えたことであり、この出会いに感謝し大事にしていきたいと思えます。(NPO法人外国人支援ネットワークすたんどばいみー事務局長 チューブ サラーン)

◆いちょう団地フィールドワーク

9月16日(土)、トヨタ財団助成事業の一環で、神奈川県の大和市と横浜市を跨る神奈川県営住宅いちょう団地で、フィールドワークをしました。

いちょう団地の入居が開始された1974年当時、入居者のほとんどが日本人でした。現在84棟まであり、1980年代にインドシナ難民や中国残留邦人帰国事業などで少しずつ外国人世帯が増加し、さらに、日本人の持家化等による住民の退去が外国人の入居増加につながり、その結果、現在いちょう団地は3600世帯のうち、外国籍の世帯が約2~3割を占め、約30カ国の人たちが共に暮らす団地となっています。

実際、歩いてみると外国人住民をかなり見かけました。また、6ヶ国語(日本語、カンボジア語、ベトナム語、中国語、スペイン語、英語)で書かれる看板も見かけました。いちょうショッピングセンターに着くと、日本では匂うことのできないアジア系の食材店の匂いがし、それらの食材店は殆どが中国系か東南アジア系住民が経営しています。

・すたんどばいみー(以降、ばいみー)活動見学

いちょう団地のフィールドワークの後、ばいみーの活動の見学しました。いちょう団地にある渋谷中学校の一階の教室を毎週末借りて、外国ルーツの小・中学生の学習支援を中心に活動しています。ばいみーの特徴としては、子ども頃にはばいみーの活動に参加し、高校生になってからスタップになるケースが多く、「当事者支援」を重視している団体です。当事者支援だからこそできる、ベトナム語教室もばいみーの特徴の一つです。ばいみーは学習支援に留まらず、生活面まで踏み込んで子どもをサポートするケースも少なくないとのことでした。この日のばいみーの小学生学習支援教室は、低中高学年に分かれて、それぞれのテーブルには生徒5、6人と支援者2人という配置で学習支援を行っていました。これまで、学習支援の組み合わせを考える際に、同じまたは近い学年を一緒に学習させることについて意識してこなかったのですが(そうすることのばいみーの活動の真意は別としても)、仲間意識の醸成やより効率的な学習効果を図れるのではないかと感じ、実践してみる価値があると感じました。今回ばいみーの活動見学を通して、当事者支援を改めて認識するきっかけとなりました。ばいみーのスタッフの多くは、ばいみーで学習していた経験を持ち、教室にも子どもにも慣れており、経験のない人に比べると早く教室の運営に慣れることができます。当事者だからこそわかる、できる支援があるので、子どもにとって心地良い居場所作りには向いていると思えます。K

F Cでも少しずつそういったことができているですが、もっと多くの生徒がばいみーのように卒業してから戻ってきて、次世代の青少年の支援をするようなサイクルが作れたらと思います。そのために卒業した生徒が戻りやすい環境を作ること考えていきたいです。ばいみーは学習支援に留まらず、多くが同じ地域で暮らす・暮らした一員としてサポートをしているため、子どもとスタッフの間の強い信頼関係も構築されています。

K F Cの学習支援教室もばいみーのようなサイクルを作ること私自身の目標に置き、これからいろんなことにチャレンジしていきたいです。(インターン 司徒 嗣)

■■■K F C日本語プロジェクト■■■

◆私の日本語ボランティアのきっかけ

私が日本語ボランティアにかかわることになったのは本当に偶然からでした。

定年退職して1年間は気ままに過ごそうと決めていました。仕事中には思うようにできなかった、登山、ハイキング、木工、美術館巡り、そして雨の日には積読ばかりだった本に目を通して。久しぶりにあった仕事仲間の一人が伊丹で日本語ボランティア活動をしていました。楽しいからあなたもしてみたらと誘われました。しかし、その時は全くその気にはありませんでした。

仕事をやめて1年が過ぎそろそろ次のことを真剣に考えなくてはと思い始めた頃でした。ある日、近くの図書館へ行った時に神戸市教育委員会主催の「日本語学習ボランティア養成講座」のチラシが目に入りました。「楽しいよ」と言っていた友人の言葉を思い出し、週1回の講座ならとりあえず受講してみようかと申し込みました。幸い受講することができ、初日に「自分で考える支援者」を養成する講座ですと言われ、その後、受講中徐々に「日本語ボランティア」のイメージができてきました。講座では日本語ボランティアをするにあたっての心構えを教えてもらったように思います。仕事をしている時は、対象がはっきりしていました。しかし、日本語ボランティアの対象が年齢、職業、背景などさまざまであることが私の興味を引きました。

講師の中にK F Cにかかわっておられる方がいたので、講座終了後、学習現場を見学させていただきました。活気ある雰囲気「してみよう」という気持ちになりました。早速ボランティア登録をしました。しかし、日本語教育に関する勉強をしたことのない私は、あらためて日本語の勉強をする必要性を感じました。教え方に関する研修会に参加したり、文法書を見直したりしました。

錆びかかった頭には、かなり負担でしたがあらためて日本語を見直す機会となりました。(石川 明子)

◆防災学習

11月1日11時。聞き覚えのある、けたたましいアラームの音が響き渡りました。警報訓練情報がスマホに届き、読んですぐに訓練だとわかりましたが、「日本語の学習をしている。皆さんは訓練だとわかったのかしら？」と気になりクラスへ顔を出しました。何事もなかったように学習が続けられていましたが、「これが本当のアラームだったら、私たちは何をしないといけないのかしら？訓練だと安心していいの？」と思いました。日本は災害大国です。

身の安全の確保、火を消す、外への出口を確保する。来日したばかりの人は知っているのかしら？クラスの時間だからこそ改めて気が付きました。

偶然にも次週8日は「災害、防災」をテーマにクラスでの全体学習を行いました。アラームの記憶も新しく、気持ちを引き締めての学習になりました。実際に避難行動をとり、防災食の試食も行いました。2名いる妊婦さんに「妊婦さんが特別に注意することなど聞いてませんか？」という素朴な疑問に「ありません。自分の身は自分で守る、ということらしいです。」という返事が返ってきました。

本当に災害が起これば、一人で避難するのが大変な人が近くにいるかもしれません。防災について一緒に学習しましたが、助け合って避難行動をとるということも頭にいれておかなければならないと思いました。(奥 優伽子)

■■■K F C外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆コーディネーターとなって

7年前、私が小学校6年生だった時、1年間ほどK F Cでお世話になりました。

そして、7年後の現在、「今度は教える側として、外国のルーツを持つ子どもたちと接してみたい」という思いを持って、9月からコーディネーターとしてK F Cで勤めることになりました。

よく生徒から「先生に見えない」と言われますが、当然の事です。これまで、もう一度KFCに戻るようになるなんて思ってもみなかったのですから。

初めに簡単な自己紹介をすると、私は小学校5年生の時に、中国から日本に来ました。

まず、小学校時代は、イジメと友達から疎外され孤独感に悩まされる日々を送りました。次に中学校時代は、2度とイジメられないようにするには自分が強くなるしかないと思うようになりました。そこで、強いイメージを作る為に不本意でもしばしばキツイ言葉を友達や親に発するようになり、無理に見栄や虚勢を張っていました。その結果、現在はマシになりましたが、人を信頼することが苦手になり、なんでも疑うようになってしまいました。そして、高校、浪人時代を経て、特に浪人時代は色々な事を気づかせてくれた1年間でした。これまで支えてくれた人たちに感謝できるようになり、いつかは恩返しすると決心しました。

今、コーディネーターとなって、生徒たちを教えていると、時折昔の自分の面影が思い浮かびます。そのことを懐かしいと思ひ、そして愛おしい気持ちが溢れてきます。たまに反抗的な態度を取るけれど、本当はいい子だということを私は知っています。たまに人を傷つけるような言葉を発するけれど、本当は理解してほしいからだと思ひます。たまに強がりを見せるけれど、それは周りに馴染もうとして、文化の異なった環境に圧迫され、本当の自分を見失いそうになるからだ、と私にはそのように思えます。生徒の一人一人にとってKFCの存在意義が異なっているかもしれませんが、ただ一つだけ確かなことがあります。それは、KFCには生徒たちを理解しようと支えてくれる人たちがいるということで、それを忘れないでほしいです。そして、これからは他人の痛みや苦しみを理解し、共感できる人に育ってほしいと願っています。(学習支援インターンコーディネーター 同志社大学 董 帥邦)

9月からインターンコーディネーターを務めさせていただいている、兵庫県立大学1回生の森上真夕子です。毎週木曜日に参加しています。食べることと猫が大好きで、家で猫を2匹飼っています。まだまだ不慣れなことばかりですが、精一杯頑張ります。

今回は10月8日のフィールドワークに、甲南女子大学や、灘高校、甲南高校の学生さんと一緒に参加しました。まず始めに、神戸ムスリムモスクでお話を聞きました。モスクに1歩入ると、建物の装飾と、日本にいるとは思えない空気の違いに圧倒されました。ここでは建物の説明や、このモスクが建てられた経緯、歴史について教えていただきました。神戸にモスクがあることを知らなかったし、気軽に入れることも知りませんでした。私の中に高くあった敷居が一気に低くなったとともに、イスラム教だから厳しそうだという固定観念で敬遠していた自分の考えを恥ずかしく思いました。

次に、モスクの近くにある、海外移住と文化の交流センターへ移動し、関西ブラジル人コミュニティ代表の松原マリナさんからお話をうかがいました。質問コーナーである学生の、「自分の親のルーツを知ることは、何か良いことにつながるのですか？」という質問に、「自分の親や祖先のことを知ることは、必ずいいことにつながる。例えば、言語がそうです。今いる日本の言葉だけでなく、自分の親や祖父母の言葉を知れば、必ずメリットになります。見方が広がります。」と力強くおっしゃっていたことが、とても印象に残っています。自分の国のことを誇りに思っている気持ちが伝わってきました。

最後に、センターの1階にある、移住ミュージアムを見学しました。センターはもともと、移民収容所という、ブラジルへ移住する日本人が船に乗るまでの宿泊施設の役割を果たしていたそうです。ちょうど学校の授業で神戸の街の歴史について学習していたので、座って勉強するだけでなく、実際に行き、目で見て、納得できたので、とても良かったです。

インターンコーディネーターとして、これからよろしくお祈いします。
(学習支援インターンコーディネーター兵庫県立大学1回生 森上 真夕子)

■■■ 八ナの会 ■■■

◆ 敬老会2017

9月12~13日の敬老会の日が始まり、朝はいつもの様に、入浴や計算問題や間違い探しをされ、次にリハビリ体操、ボール投げ、ボール回し、輪回し、輪投げ、口腔体操もいつもの様にされました。スタッフが一声に連携して、食事のセッティングをし、理事長挨拶、続いて、兵庫韓国青年商工会が車椅子を2台寄贈して下さり、利用者様感謝で拍手喝采でした。次に調理スタッフの朴が心を込めて作った多彩なフルーツの盛り合わせ他、様々な手料理を準備

し、皆様感謝で手を合わせ「頂きます」の合図で食事が始まりました。肉の焼ける音がする中、オモニ、ハルモニまだかまだかと、ワイワイガヤガヤし、兵庫韓国青年商工会の方々とともに色々とお話ししながら肉の焼けるのを待つばかり、焼けだすとお話も減り、手と口が一生懸命にメインの肉とフルーツも一気に平らげ、前日から仕込み今日作った食事もあったという間に平らげ、スタッフから驚きの声がでました。オモニ、ハルモニ凄いですね。肉完食です。利用者様、嚥下の心配もなく、よく召し上がられました。そして、食事前の理事長の挨拶で「今日は、Aランクに近い良い肉です。毎回この様な肉を出したいのですが、出したらハナの会は潰れます」との言葉は本当ですね。オモニ、ハルモニたちは肉食ですね。アボジ、ハラボジやはり世の女性は、強しですね。男性も良く食べましたが、女性の人数が圧倒的に多いです。これだけ食が進むのは、長生きの秘訣ですね。食後は、スタッフ皆で床の間の用意をし、利用者様は一息入れて午睡し、お目覚め後、配茶しスタッフ敬老会の準備です。最初に椅子を東西に押し並べて利用者様に座って頂き、いざ敬老会2時に開会式、私は慣れない司会進行を任せられ、棒読みにて始まり、いざゲームスタート。まずはトイレットロール運び。利用者様は東西に分かれ座って左右に紐を伸ばし前列の人が、トイレットロールを前から1筒ずつ紐を通し隣に一人ずつ送って行き10筒を後まで届くとUターンして前まで全部送り、先に送った方が勝利です。最初2回程練習して、いざスタート。最初は、なかなか上手く通せず後半は慣れていき、段々と声援が止まらず早く早くと急がされトイレットロールゲームはどちらのチームも大差なく、ジャンケンで勝利チームを決め勝利チームには、金のトロフィー、準優勝チームには銀のトロフィーと先頭の代表者が受け取り皆様拍手で喜びました。

次の玉入れゲームは席に座って頂き、利用者様の前をスタッフが背中に籠を背負ってゆっくりと進み揺れながら前列から後列まで行きUターンし前列まで戻りその合間にお互いの赤玉と白玉を籠に入れて行きます。2回勝利した方が勝ちです。1人7玉ずつ渡され、いざ勝負。皆様元気よく籠に投げて行きます。もう皆様すごいです。利用者と思えない頑張りです。介護度下がったかも～！！あとは、想像にお任せあれ～です。

次にお尻フリフリで締め括りをしました。次に皆様方と歌う歌を盛り上げて行きます。歌はセタリョン、河内男節、故郷などなどと、皆様大いに盛り上がり大喜びでした。3日間皆様お疲れ様です。利用者様方々その元気で長寿でいらしてください。（山下 孝博）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆秋の一日

私たちの演奏が終わりました。思い出すと未だにドキドキしています。

9月10日に帰国者が多く在住する明舞団地付近のみなく～る明舞にて、帰国者と地域の方々初めて交流会が開かれました。帰国者のボランティア達は中国伝統菓子「麻花」（小麦粉の揚げ物）を振る舞い、大勢な人々が集まり、盛大に賑わいました。

イベントのプログラムはあかね32サニーシックスによるフルート演奏と合唱、マリー赤木によるマジックなどありますが、その中に私たち帰国者の中国伝統楽器二胡、フルスの演奏の披露もありました。日本人である地域の方々には中国の民族音楽に馴染みがないかもしれませんが、観客たちは真剣な眼差しを感じながら、演奏に夢中しました。音楽は国境がないと言いますが、まさかその通りだと感じました。今回の交流会は音楽やお菓子を通して、長年中国で暮らしてきた私たち帰国者のことを地域の方少しも分かってもらえれば嬉しいです。さらに、日本人の地域の方と仲良くなりたいと思っています。（範 宝珍）

■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護八ナ ■■■

◆グループホームハナに入職して

7月7日から就業開始し、11月で5カ月になります。介護職は未経験です。就職のきっかけは、多文化共生に興味を持っていたことです。デイサービスハナの事業内容が多文化共生を軸にした運営であることを知り、書類応募を致しました。現在は、職場環境や仕事にも慣れ、先輩方のご指導のもと、誠実をモットーに働いております。11月からは夜勤に入りますので、着実に仕事を覚え、利用者様たちが安心して暮らせる家づくりの一助となるように努めます。

<働いてみて感じた事>

前職は福祉関連でしたが、前述のとおり介護職は未経験です。さらに、認知症の方との接点もなく、当初はどのように対応することが適しているのかが分からず不安でした。その中で、前職との共通点は「すべての行動に手を出さずに見守る」という行為です。また、日常的に行われる（接し方、トイレや入浴、食事の介助、口腔ケア、移乗、歩行等）すべての事が難しいと感じました。利用者様の意思を尊重しつつ、行う事を誘導する。未経験故に出来事全てに不安を感じていましたが、不安を感じている人の方が介護に向いているという上司の言葉に励まされ、ゆっくりとですが、仕事の幅を広げつつあります。（2階介護スタッフ 北詰 瑠美）

◆中国の方の餃子の作り方

さて随分と寒くなってきましたが、小規模ハナで久々に利用者様たちと調理を楽しみました。姫路の看護学生さんが実習にて利用者様とレクリエーションと一緒に調理をしたいと提案されたので、では餃子なら中国の方が得意だからやってみようということになりました。

さあ本番、朝に迎えに行く車の中で最近、休みがちだったS Iさんが張り切っています。さらにSOさんもやる気満々なものですから、お互いが「やる」と言い出して喧嘩する場面もありましたが（笑）何とかスタート。学生さんがまずビックリしたのが「皮から作るんですか?」「ですよー（笑）」みんなで一緒に皮作り班とタネを包む班に分かれて開始。みんなでワイワイおしゃべりしながら淡々と作っていきました。中国組はさすがに上手！学生さんは…、何とか200個ぐらい作り中国流に水餃子にして美味しく頂きました。

皆さん良い笑顔。利用者様の笑顔をもっと引き出せる介護をドンドンしていこうと思いました。（野津 隆司）

■■■ 今後の予定 ■■■

■日本語ボランティアのための基礎講座（全9回）

10月8日（日）～12月24日（日）於 新長田勤労市民センター

■日本語プロジェクト

12月17日（日） 日本語カフェ 於 デイサービスセンターハナの会

■多文化子ども共育センター

12月22日（金） イラストワークショップ

12月26日（火） 年末お楽しみ会

■KFC帰国者新長田交流会

11月26日（日） まちの文化祭 於 ふたば学舎

■本部事務所の年末年始のお休み

12月29日（金）～ 1月3日（水）